

# 研究結果報告書

## 近代初期[1868-1910]日本における朝鮮人像の形成と韓国における日本人像の形成をめぐる比較研究

所属：高麗大学 日語日文学科

役職：教授

氏名：鄭 炳浩

本研究は、近代初期の日本と朝鮮において朝鮮人像と日本人像がそれぞれいかにして形成されていったのか、また相手国についていかに認識していたのかを比較分析することを目的としている。

この分野については1990年代後半から活発に議論がされており、多くの研究成果が蓄積されてきた。先行研究が指摘しているように、日本では新聞・雑誌メディアは勿論のこと、様々な資料や文献などで、文明と野蛮という文明論の立場から朝鮮人を見下すか、否定的な観点から捉えている場合が極めて多く、この認識は結局日本の自己中心的なナショナル・アイデンティティの構築と繋がっていた。一方、朝鮮半島のメディアでは東洋平和論や東洋三国をめぐる様々な論理に基づきながら、朝鮮の植民地化を推進する日本側の論理に積極的に対応していった。

こうした先行研究の知見に基づきながら、特に本研究が注目したのは1905年から1910年に朝鮮半島内で流通していた、ハングル新聞と日本語メディアにおける日本・朝鮮認識である。その結果、第一に、朝鮮側の『大韓毎日申報』（1904年創刊）・『皇城新聞』（1898年創刊）などのハングル新聞と日本語雑誌『朝鮮』（京城、日韓書房、1908年創刊）を初めとする日本語メディアの間には相手の国に対する様々な認識は勿論のこと、朝鮮に対する日本の植民地化の動きをめぐる多様な論戦が交されていたことが分かった。第二に、このように相手に対する認識は文明論や東洋三国関係論（連帯論）、東洋平和論などを中心に展開されており、日本（人）・朝鮮（人）に対する認識も時期によって一定の変化が見られた。第三に、このような論理を展開する際、ハングル新聞と日本語メディアは、それぞれ相手の論調を強く意識しながら、互いに論陣を張っていたことが明らかとなった。即ち、すでに1900初年代から朝鮮半島の中では、朝鮮側のメディアだけではなく、多数の日本語新聞や雑誌など日本語メディアが刊行されており、様々な歴史的な事件の展開に伴って相互拮抗していたのである。

口頭発表 （題名・発表者名・会議名・日時・場所等）

論文 （題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）

「朝鮮半島における日本語メディアと日韓両国の認識研究（1905-10）－ハングル新聞と日本語雑誌『朝鮮』を中心として」、鄭炳浩、韓国日本学会『日本学報』、2017. 11. 30

書籍 （題名・著者名・出版社・発行時期等）